

近畿能開生が自動測定装置

実習の成果、採用つかむ

近畿職業能力開発大学校（近畿能開大）の学生が開発課題実習で取り組んだ成果が、企業の製造現場で採用された。指導教員の佐藤桂准教授は「学生の実習は試作品で終わることが多いが、どうせなら実際に納入できるものを作り上げよう」と取り組んだ」と金属加工のエナテック（大阪府和泉市）と協力した3年間のプロジェクトを振り返る。学生による製造現場での最終調整を終え、近く同社で「実戦投入」される。

（大阪・尾本憲由）

エナテックの本社工場の片隅では、1月半ばから1カ月以上、学生が入れ代わり立ち代わり訪れた。納入した真円度形状寸法測定機の最終調整を行うためだ。現場での照明や電源、機械から発生する

開発したのは、トラッククロメーターを使い、あるフロントアクスル直径約260ミリの円カバリの測定を自動化する装置。従来はマイクロは100万分の



アルバイトで働いていた近畿能開大の学生2人はエナテックに入社した（右は真円度形状寸法測定機）

エナテック、課題出し協力

1）で測定するにはあった。「経験がある技術者でないと難しい」（榎並社長）。加えて直径が正確でも真円とは限らず、納入先の要求の厳格化と相まって、同社は対策に迫られていた。

近畿能開大では応用課程2年生（一般の大学の4年生に相当）で、佐藤桂准教授（情報）がプログラムの開発を担当する。佐藤教授は「学生は、1年かけて開発課題に取り組み、毎週、1人1つの課題を提出し、先生が指導する」という。佐藤教授は「学生は、1年かけて開発課題に取り組み、毎週、1人1つの課題を提出し、先生が指導する」という。

近畿能開大では応用課程2年生（一般の大学の4年生に相当）で、佐藤桂准教授（情報）がプログラムの開発を担当する。佐藤教授は「学生は、1年かけて開発課題に取り組み、毎週、1人1つの課題を提出し、先生が指導する」という。佐藤教授は「学生は、1年かけて開発課題に取り組み、毎週、1人1つの課題を提出し、先生が指導する」という。

も生産技術部門はあるが、学生のように一つ一つのテーマに時間をかけてじっくり取り組む余裕はない。加えて「毎年学生が入れ代わった結果、合計で40人以上が携わってくれたことが大きい。学年が代わり新しい発想で課題が解決されることもあった」と経営戦略室の榎並幹也室長は指摘。未熟ながら発想が柔軟な学生との産学連携の効果を実感する。

1年目の開発チームに加わったアルバイト2人は、卒業後にエナテックに入社した。そのうち1人は、後輩たちが引き継いで完成させた測定機の責任者になるという。同社は再び、25年度から新しいテーマを近畿能開大に提案する考えだ。